



西尾 朗教授

## 西尾 朗教授記念号によせて

社会学部長 遠 藤 惣 一

西尾朗先生は本年1989年3月末に定年退職されることになり、誠に寂しい限りです。

西尾先生は昭和18年に関西学院大学文学部英文科をご卒業後、戦中から戦後の激動期に毎日新聞大阪本社編集局に勤務されましたが、昭和23年から教職の道に進まれ、昭和24年に関西学院専門学校理工専門部専任講師になられ、翌25年、関西学院短期大学応用化学科専任講師、26年、同短期大学英文科専任講師、昭和29年に同助教授に昇任されておられます。昭和32年から35年の間、一旦神戸女学院大学文学部英文科の助教授として転出されましたが、昭和35年に関西学院大学に社会学部が新設されると同時に、本学に戻られ、本学部の助教授に就任され、39年教授となられ、自来今日まで本学部の英語教育の中心的役割を担われ、文字通り創設期から本社会学部の発展に尽力されてきました。

先生はまた学外でも随分活躍され、日本時事英語学会の関西支部長、学会理事、副会長などを歴任され、現在も日本英語検定協会の1級試験面接委員を務められています。さらにご専門の英文学では10編を超える注釈書を研究社、英宝社、成美堂などから出版されています。

先生の研究内容については、全く門外漢でありますので、申し上げる資格もないのでありますが、「社会学部紀要」に発表された論文を拝読する限りでは、先生の一貫して追究されてきたテーマのひとつは「英国における中国の映像」であります。先生はまず17世紀前半までの中国に対する英国の関心を John Mandeville の文学作品を通して分析され、やがて英文学に与える中国の影響がもっとも高まる18世紀の時期は、文学のみならず工芸、美術、造園など広い分野に「中国趣味」という形で具体化し、「英国文化史に異彩な一頁を飾ることとなる」ことを解明されています。これらの先生の関心と学問的追究の仕方は多分に知識社会学の領域に十分含まれるものであることを知りました。このような社会学的発想は先生が長年本社会学部に身を置かれたことと無関係でないように思えます。

先生とは個人的に大変親しくしていただき、1977年に英国に留学中、先生も同じく英国におられ、一度ロンドン郊外の私の滞在していた家に訪ねていただいたことがあります。その時さすがに英語の達者な先生もひさしぶりに日本語をしゃべる機会であったのか、ちょうど同席した娘が先生の饒舌ぶりをいまでもわが家で語り草にしています。また先生は大変な犬好きで、大学紛争時に飼われていた犬の話をよく聞きました。冗談で家の者よ

り自分の気持ちがよく分かっているなどおっしゃっていましたが、その犬が死んだ時、今度は自分の方が先にいくかも知れないので、かわいそうだからもう犬は飼わないとおっしゃったのを強烈な印象で覚えています。西尾先生、どうか長年の禁を破って犬を飼って下さい。

定年退職後もますますご壮健で、ご活躍の程を念願して止みません。